

<学術論文>

英語および英語学習に対する信念の構造と4技能間比較

島田英昭 信州大学学術研究院教育学系
鈴木俊太郎 信州大学学術研究院教育学系
田中江扶 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：英語教育，自律性，主体性，動機づけ，信念

1. 問題と目的

1.1 英語および英語学習に対する信念

近年のグローバル社会の中で，英語教育に対する関心が高まっている。その中で本研究は，英語学習者の持つ英語および英語学習に対する信念 (belief) に着目する。

信念とは，ある対象に対して人間が持つ思い，考え方，認知を指す。学習研究においては，たとえば，Schoenfeld (1985)は数学学習の領域で，「数学は現実の問題解決には役立たない」「数学は天才にしかできない」といった信念を例示している。また，Horwitz (1985)は，第2言語習得の領域で，「繰り返し練習することは重要だ」「外国語学習の問題は，新しい語彙をたくさん覚えられるかどうかにある」といった信念を例示している。これらの信念は，学習者の学習行動に影響することが知られている。一例として，自己調整学習理論 (たとえば，中谷，2012) によれば，学習者の信念は学習への動機づけに影響するとされている。

英語学習においては，自発的に学習時間を確保することがとりわけ重要になる。なぜなら，近年は「聞く」「話す」を中心とした即時的コミュニケーションの道具としての英語が求められており，即時的コミュニケーションにおいて円滑に英語を利用できるようになるためには，一定の練習時間の確保が必要だからである。そのため，授業や企業研修といった限られた時間だけではなく，自発的に英語に接する時間を確保することが求められる。加えて，学校教育では，平成29年3月告示の小学校学習指導要領 (文部科学省，2017a, p.3 ほか) および中学校学習指導要領 (文部科学省，2017b, p.3 ほか) において「主体的・対話的で深い学び」が求められている。本研究は学校教育を直接的に対象にしているわけではないが，主体的な学びの促進のための研究に位置づけられる。

1.2 本研究が着目する信念の種類

信念は，対象とする領域や分類の観点によりさまざまなものがあり得る。本研究は，英語学習者が素朴に持つと考えられる努力信念，能力信念，動機づけ信念，結果信念の4つの信念を取り上げる。

努力信念は，英語の上達に対する努力との随伴性を指す。たとえば「英語の勉強をしっかりとすれば，英語が実用的に使えるようになる」といった信念を指す。能力信念は，英語の上

達に対する能力との随伴性を指す。ここで言う能力は、生まれ持った才能やセンスという意味で用いる。たとえば「英語をいくら勉強しても、才能がなければ上手にならない」といった信念を指す。これらの信念は、英語学習に限らず、さまざまな対象に対して学習者が素朴に持つと考えられるため、検討に加える。

動機づけ信念は、英語の上達に対する動機づけとの随伴性を指す。たとえば「英語はその気になればすぐに習得できるものだ」、「1日たった5分でも、毎日続ければ英語力が上がる」といった信念を指す。動機づけ信念は努力信念に近い概念であるが、やる気や継続性を重視している。本研究では、努力信念と動機づけ信念を分けて検討しながら、この2つの信念の区分についても検討することとした。

結果信念は、英語の実用性、有用性に関する認知を指す。たとえば「英語は日常のさまざまな場面で役立つ」といった信念を指す。教育現場では、「英語は将来の仕事で役に立つ」といった言及がされることが多く、また実際にそのような信念から英語学習につながる可能性があることから、検討に加える。

さらに本研究では、上記の信念を「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能に分けて測定する。過去の学校における英語教育では、「読む」「書く」が重視されていたが、近年の即時的コミュニケーション重視の流れから、「聞く」「話す」が重視されている。このような英語教育に対する期待の変化から、信念が4技能で異なっている可能性があるため、検討に加える。

1.3 本研究の目的

本研究の目的は、次の2点である。第1に、英語および英語学習に対する信念の因子構造と、各信念と英語学習行動の関係について、質問紙調査により明らかにする。第2に、信念を4技能に分けて測定し、各信念における4技能間の強さの違いと、4技能間の関係について、質問紙調査により明らかにする。

また、本研究の特徴は、次の2点である。一つは、本研究が日本人の英語学習に特化することである。従来、英語教育に関係する信念研究は、第2言語習得の分野で行われてきた。しかし、母語や文化の影響は大きく、結果を日本人の特徴に合わせて実用的に生かすためには、日本人の英語学習を対象とした研究が必要になると考えられる。もう一つは、大学生とビジネスパーソンを調査の対象にすることである。従来の信念研究は、データ取得のしやすさから、大学生を対象にすることが多かった。しかし、近年のグローバル化により英語の必要性が増加し、ビジネスパーソンにとって仕事のしかたやキャリア形成に大きく影響すると考えられる。そこで本研究は、インターネット調査を利用することでビジネスパーソンからもデータを収集した。

1.4 倫理的配慮

本研究は、信州大学教育学部内倫理審査を受け、承認を得た（承認番号：H29-9）。

2. 研究1：英語および英語学習に対する信念の構造

2.1 目的

英語および英語学習に対する信念の因子構造と、各信念と英語学習行動の関係を明らかにする。

2.2 方法

(1) 質問項目

まず、英語および英語学習に対する信念を測定するため、BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) 等の先行研究(Horwitz, 1985)および島田・鈴木・田中(2016)の項目と結果を参考に、努力信念(例：英語の勉強をしっかりとすれば、英語が実用的に使えるようになる)、能力信念(例：英語をいくら勉強しても、才能がなければ上手にならない)、動機づけ信念(例：英語はその気になればすぐに習得できるものだ)、結果信念(例：英語は日常のさまざまな場面で役立つ)を測定する項目を6項目ずつ作成した。教示は「以下の質問について、一般的にあなたがどのように思うか、1(全くそう思わない)～5(とてもそう思う)の5段階で、当てはまるものを選択してください。」として、「1 全くそう思わない」「2 あまりそう思わない」「3 どちらともいえない」「4 ややそう思う」「5 とてもそう思う」の5段階評価による回答を求めた。

次に、英語学習行動を測定するため、島田らの研究(島田他, 2016)を参考に、継続的な英語の自習ができるかどうかの自信を評価する6項目を作成した(例：英語の勉強時間は長い方だ)。教示は「以下の質問について、あなた自身に対してあなたがどのように思うか、1(全くそう思わない)～5(とてもそう思う)の5段階で、当てはまるものを選択してください。」として、各項目「1 全くそう思わない」「2 あまりそう思わない」「3 どちらともいえない」「4 ややそう思う」「5 とてもそう思う」の5段階評価による回答を求めた。

以上の項目の内容妥当性については、心理学を専門とする大学教員2名と英語教育を専門とする大学教員1名(本論文の著者3名)によって確認した。

その他、年齢・性別の質問、本内容と無関係の質問2項目を入れた。

(2) 研究参加者

大学生519名(18-23歳, 平均20.7歳, 男性253名, 女性266名)が参加した。

(3) 手続き

インターネット調査会社に委託し、2017年2月3日から6日の間に行った。質問項目はウェブブラウザ上に表示され、パソコン、タブレット、スマートフォン等で回答できる形式とした。回答画面は5ページから構成され、1ページ目にスタート画面、2ページ目に性別・年齢に関する質問項目、3ページ目に英語学習行動に関する質問項目、4ページ目に英語および英語学習に対する信念に関する質問項目(無関係の2項目を含む)、5ページ目にお礼の文章が配置された。英語学習行動に関する質問項目と英語および英語学習に対する信念に関する質問項目の提示順序はランダムとした。

表1 英語および英語学習に対する信念に関する質問項目と因子負荷量

項目	因子負荷量			平均	SD
	努力	能力	結果		
英語の勉強に時間をかければ、英語は必ず上達する。	.768			3.52	0.96
英語の勉強をすればするほど、英語の力が上がる。	.766			3.62	0.93
英語学習は時間をかけるほど上達するものである。	.726			3.53	0.92
英語の勉強をしっかりとすれば、英語が実用的に使えるようになる。	.641			3.55	0.94
やる気さえあれば英語は上達する。	.618			3.41	0.95
英語の上達にはもとの才能やセンスが必要である。		.805		3.17	0.93
英語をいくら勉強しても、才能がなければ上手にならない。		.733		2.79	0.96
英語は努力よりもセンスが重要である。		.703		2.99	0.89
英語が上手な人は、もともとセンスがあった人が多い。		.685		3.08	0.96
英語は大人になってから学んでも、なかなか上達しない。		.391		3.18	0.99
日本に住んでいても、英語は役立つ。			.829	3.76	0.89
英語が使えることは人生を豊かにする。			.808	3.83	0.91
英語は日常のさまざまな場面で役立つ。			.719	3.71	0.95
英語ができると、仕事が有利に進む。			.716	3.83	0.88
日本人に英語は必要ない。(R)			-.500	2.23	1.03

注：(R)は反転項目である。「努力」は努力信念、「能力」は能力信念、「結果」は結果信念を表す。

2.3 結果

(1) 英語および英語学習に対する信念の因子構造

はじめに、すべての項目を分析対象として、探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。「1 全くそう思わない」を1点, 順次「5 とてもそう思う」を5点として得点化した。因子数は, 固有値1以上基準から4因子とした。その結果, 第1因子が努力信念と動機づけ信念, 第2因子が結果信念, 第3因子が能力信念の項目の因子負荷量の絶対値がそれぞれ高く, 解釈が可能であった。しかし, 第4因子は4種の信念の項目が混在して解釈が困難であり, かつ因子負荷量の絶対値が全体的に低かった。そこで, この時点で第4因子は解釈せずに3因子構造と判断し, 当初想定した努力信念と動機づけ信念を合わせ, あらためて「努力信念」と解釈することにした。

次に, 後の英語学習行動との関係を共分散構造分析により分析するために, 3種の信念に関する確認的因子分析を実施した。探索的因子分析の結果の因子負荷量と内容妥当性を考慮しながら, 各因子の観測変数として5項目ずつ抽出した(表1)。単純構造の3因子モデルを仮定し, 因子間相関を仮定したが, 誤差間相関は一切仮定しなかった。その結果, 適合度指標は $CFI = .935$, $RMSEA = .066$ であり, 標準化した因子負荷量の絶対値は最低で.39であった。因子負荷量が低い項目もあるが, 因子からみた内容妥当性, 単純構造の強い仮定の結果であることを考え, 妥当に信念を測定していると考えた。因子間相関は, 努力信念と能力信念の間が $r = -.035$, 能力信念と結果信念の間が $r = -.068$, 結果信念と努力信念の間が $r = .644$ であった。各因子の観測変数について, クロンバックの α 係数を算出した結果, 努力信念, 能力信念, 結果信念の順に.828, .792, .832であり, 十分な内的一貫性が認められた。

英語および英語学習に対する信念の構造

表 2 英語学習行動に関する質問項目と因子負荷量

項目	因子負荷量	平均	SD
自分は英語の勉強に力を入れている。	.752	2.56	1.11
自分は英語の勉強時間は長い方だ。	.744	2.40	1.10
自分は英語の勉強に対して努力できる。	.680	2.87	1.07
自分は英語の勉強時間を確保する努力ができる。	.671	2.77	1.03
自分は英語の勉強が長続きしない。(R)	-.479	3.30	1.10
自分は英語の勉強をするとすぐに飽きてしまう。(R)	-.471	3.20	1.11

注：(R)は反転項目である。

(2) 各信念と英語学習行動の関係

はじめに、英語学習行動の指標としての妥当性を検討するために、確認的因子分析を行った。当初の 6 項目による 1 因子構造としたが、適合度を参考にして、「自分は英語の勉強が長続きしない。」「自分は英語の勉強をするとすぐに飽きてしまう。」の項目間に誤差間相関を仮定した。その結果、適合度指標は $CFI = .966$, $RMSEA = .088$ であり、十分に適合していた。 α 係数は .811 であり、十分な内的一貫性が認められた。

次に、努力信念、能力信念、結果信念が英語学習行動に与える影響を検討した。上記の確認的因子分析で用いた構造に、各信念因子から英語学習行動因子へのパス、および英語学習行動因子に対する誤差項を加えたモデルにより、共分散構造分析を行った。その結果、適合度指標は $CFI = .923$, $RMSEA = .058$ であり、十分に適合していた。パスについては、努力信念の有意な正の効果 ($\beta = .22$, $p = .004$), 能力信念の有意な負の効果 ($\beta = -.13$, $p = .017$), がみられたが、結果信念の効果 ($\beta = .02$, $p = .770$) は有意ではなかった。英語学習行動因子に対する決定係数は $R^2 = .071$ であった。

2.4 考察

探索的・確認的因子分析の結果から、本研究が想定した動機づけ信念は努力信念に包含され、努力信念、能力信念、結果信念の 3 因子構造で信念を捉えることが妥当であると考えられる。また、確認的因子分析の結果から、努力信念と結果信念の関係が強く、能力信念はそれらとは独立であると考えられる。さらに、英語学習行動を含めた共分散構造分析の結果から、英語学習行動に対し、努力信念に関しては正の、能力信念に関しては負の影響があり、結果信念に関しては影響がないと考えられる。

3. 研究 2：英語および英語学習に対する信念の 4 技能間比較

3.1 目的

信念を 4 技能に分けて測定し、各信念における 4 技能間の強さの違いと、4 技能間の関係を明らかにする。また、大学生に加えてビジネスパーソンからもデータを取得し、大学生とビジネスパーソンの比較を行う。

3.2 方法

(1) 質問項目

信念に関して表 1 に示した 15 項目に対して、「英語」を「英語のリスニング」等に変更

し、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの各技能に特定した質問に変更した。

項目は各技能の 15 項目をひとまとめにした。また、各技能の教示を、たとえばリスニングの場合には「以下の項目は、英語のリスニング（聞くこと）についての質問です。それぞれの質問について、一般的にあなたがどのように思うか、（全くそう思わない）～（とてもそう思う）の 5 段階で、当てはまるものを選択してください。」とした。他の技能の場合には、「リスニング（聞くこと）」の部分を「スピーキング（話すこと）」「リーディング（読むこと）」「ライティング（書くこと）」に変更した。この変更部分は、ウェブページ上で赤字で表現し（通常の文字は黒）、目立つようにした。各項目への回答は、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらともいえない」「ややそう思う」「とてもそう思う」の 5 段階評価とした。

その他、年齢・性別の質問を入れた。

(2) 研究参加者

研究 1 に参加していない大学生 534 名（男性 256 名、女性 278 名、平均 20.9 歳）およびビジネスパーソン 528 名（男性 262 名、女性 266 名、平均 31.0 歳）が参加した。

(3) 手続き

研究 1 と異なる点のみ述べる。2017 年 4 月 25 日から 27 日の間に行った。回答画面は 7 ページから構成され、1 ページ目にスタート画面、2 ページ目に性別・年齢に関する質問項目、3～6 ページ目に各技能における英語および英語学習に対する信念に関する質問項目を 1 技能に 1 ページずつ、7 ページ目にお礼の文章が配置された。3～6 ページ目における技能の提示順序と、各技能の質問項目の提示順序はランダムとした。

3.3 結果

(1) 4 技能間の強さの違い

各項目の回答を「全くそう思わない」を 1 点、以下順次点数を加え、「とてもそう思う」を 5 点として得点化し、大学生とビジネスパーソンごとに、各技能の各信念の評定値を平均し、尺度得点を算出した（表 3）。クロンバックの α 係数はいずれも .80 以上であった。

平均値を比較するために、属性（2; 大学生、ビジネスパーソン）×信念（3; 努力信念、能力信念、結果信念）×技能（4; 聞く、話す、読む、書く）の 3 要因混合分散分析を行った。参加者内要因については、Greenhouse-Geisser の自由度補正を用いた。その結果、信

表 3 各信念の技能別平均値

	聞く	話す	読む	書く
努力信念	3.60/3.54	3.60/3.52	3.65/3.54	3.56/3.48
能力信念	3.03/3.02	3.04/3.09	2.93/2.94	2.91/2.98
結果信念	3.66/3.63	3.70/3.64	3.63/3.54	3.50/3.43

注：スラッシュ（/）の前は大学生、後はビジネスパーソンの値である。

英語および英語学習に対する信念の構造

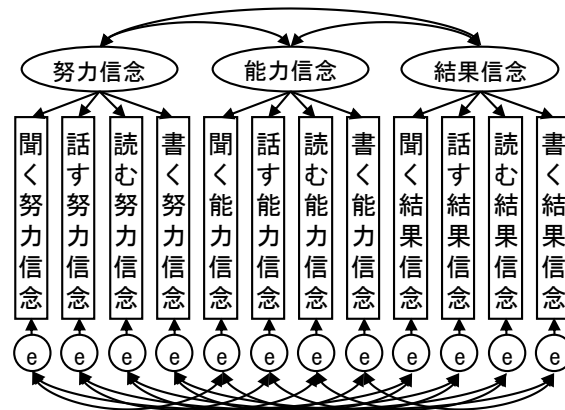


図1 確認的因子分析の構造

念の主効果 ($F(1.39, 1475.77) = 350.50, MSe = 1.99, p < .001, \eta_p^2 = 0.249$), 技能の主効果 ($F(2.93, 3104.52) = 45.43, MSe = 0.208, p < .001, \eta_p^2 = 0.041$), 信念×技能の交互作用 ($F(5.41, 5732.04) = 19.33, MSe = 0.139, p < .001, \eta_p^2 = 0.018$) が有意, 属性×信念の交互作用 ($F(1.39, 1475.77) = 2.70, MSe = 1.99, p = .087, \eta_p^2 = 0.003$) が有意傾向であり, 2次の交互作用を含め, 他に有意な効果はなかった。

属性×信念の交互作用について, 各信念における属性の単純主効果を検討したところ, 努力信念のみ有意であり ($F(1, 1060) = 3.84, MSe = 1.926, p = .054, \eta_p^2 = 0.004$), 能力信念, 結果信念は有意ではなかった。また, 信念×技能の交互作用について, 各信念における技能の単純主効果を検討したところ, すべての信念において有意であった (努力信念, 能力信念, 結果信念の順に, $F(2.95, 3129.51) = 6.64, MSe = 0.152, p < .001, \eta_p^2 = 0.006$; $F(2.92, 3097.62) = 25.78, MSe = 0.168, p < .001, \eta_p^2 = 0.024$; $F(2.78, 2949.35) = 63.02, MSe = 0.151, p < .001, \eta_p^2 = 0.056$)。Holm法による多重比較 (*adjusted p* < .05) の結果, 努力信念では「聞く」「読む」と「書く」の間に, 能力信念では「読む」と「書く」の間以外のすべての技能間に, 結果信念ではすべての技能間に有意な差がみられた。

(2)4 技能間の関係

4技能間の関係を確認するため, 各信念において4技能間の相関係数を算出した。大学生のみ, ビジネスパーソンのみ, 両者含めての, すべての相関係数を確認したところ, 最小で $r = .65$, 最大で $r = .83$ (無相関検定の結果, すべて $ps < .01$) であった。ここから, 4技能に共通の因子を仮定できると考え, 図1に示す確認的因子分析を行った。大学生とビジネスパーソンの2母集団の同時分析とした。誤差間相関は, 3信念の中で同じ技能の観測変数にのみに仮定した。その結果, $CFI = .980, RMSEA = .051$ と十分な適合度が得られた。標準化した因子負荷量は両群を通して.78以上であった。因子間相関は大学生・ビジネスパーソンそれぞれ, 努力信念と能力信念が $r = -.00$ と $-.01$, 能力信念と結果信念が $r = -.05$ と $-.03$, 結果信念と努力信念が $r = .80$ と $.77$ であり, 研究1の傾向と合致していた。

3.4 考察

分散分析において、属性×信念の交互作用に対する属性の単純主効果が努力信念のみみられたことから、ビジネスパーソンよりも大学生の方が努力信念が強いと考えられる。能力信念についてはほとんど差がないか、あるいは大学生の方が若干低いこと、結果信念については全体的に大学生が高いことを合わせて考えると、ビジネスパーソンの方が英語学習に対して悲観的な信念を持っているのではないかと考えることもできるが、今回は有意な差はみられなかった。

また、信念×技能の交互作用に対する技能の単純主効果の分析から、努力信念については「聞く」「読む」が強く、「書く」が弱いのではないかと考えられる。有意な差はみられていないが、特に大学生の「読む」が強いのではないかと考えられる。能力信念と結果信念については、共通して「聞く」「話す」が強いのではないかと考えられる。

以上で議論した平均値の絶対的な差はそれほど大きくなかった。有意な差がみられている条件間でも、サンプルサイズが大きいため、微少な差を検出している可能性がある。効果量が全体的に低いことも、このことを裏付けている。したがって、4技能間の信念の強さの差違については、それほど大きくないのではないかと考えられる。

4技能間の相関係数の分析と共分散構造分析の結果から、各信念において4技能間の相関係数が高く、4技能を1因子とするモデルの適合度が高いこと、すなわち各信念において4技能間の共変関係が強いことが明らかになった。ここから、4技能間の信念はほとんど分化しておらず、「英語を読む」「英語を書く」といった技能別ではなく、「英語」全体で認知されていると考えた方が妥当ではないかと考えられる。

4. 総合考察

4.1 英語および英語学習に対する信念の構造と学習行動

本研究の第1の目的は、英語および英語学習に対する信念の因子構造と、各信念と英語学習行動の関係について、質問紙調査により明らかにすることであった。

因子構造については、当初は努力信念、動機づけ信念、能力信念、結果信念の4つの信念を想定したが、動機づけ信念は努力信念に包含された。動機づけ信念は、やる気や継続性を重視した概念として想定したが、学習者の認知としては動機づけを努力に含めることが妥当であると考えられる。

抽出された3つの信念の中では、努力信念と結果信念の関係が強く、能力信念はそれらとは独立であった。この傾向は、研究1,2で一貫していた。努力信念と結果信念の関係が強かったことから、努力により英語が上達し、そこから英語の実用性、有用性につながるという一連の流れの形式で信念が形成されているのではないかと考えられる。一方、能力信念については、この流れとは独立に形成されているのではないかと考えられる。このような信念構造の理由を推察すると、英語学習のプロセスの中で努力、上達、実用・有用という流れで学習者の動機づけを促す環境があるのではないかと考えられる。

英語および英語学習に対する信念の構造

各信念が英語学習行動に与える影響を検討したところ、努力信念に関しては正の、能力信念に関しては負の影響があり、結果信念に関しては影響がみられなかった。この理由、特に結果信念に関しての影響がなかったことについて推察すると、英語の上達は試験等で実感が持てるが、現状では英語を役立てる場面が少ないために実感が伴わず、英語学習行動を促すまでの強さの信念になっていない可能性がある。しかし、逆の可能性として、結果信念は本質的に英語学習行動に影響しない可能性も考えられる。この違いは教育現場において重要である。教育現場では、英語学習の動機づけを高めるために、英語が話せると仕事で役立つ、といった英語の実用性、有用性が主張されることがある。もし、結果信念が英語学習行動に影響しないのであれば、このようなアプローチはあまり役に立たないことになる。一方で、英語を役立てる場面が増え、実感が伴うにつれて結果信念が学習を促進するのであれば、実体験を伴う条件を整えば、結果信念の効果が期待できる。これらの可能性を本研究では明確にできないため、今後の課題となる。

なお、各信念が英語学習行動に与える影響の分析において、英語学習行動に対する決定係数が低かったことには注意が必要である。サンプルサイズが大きいため、努力信念と能力信念の効果が有意になってはいるが、学習行動に信念が実質的にどの程度の影響があるのかという点も、今後の課題となる。

4.2 信念の4技能間比較

本研究の第2の目的は、ビジネスパーソンを含めて信念を4技能に分けて測定し、各信念における4技能間の強さの違いと、4技能間の関係を明らかにすることであった。

4技能間の強さの違いでは、努力信念については「読む」が全体的に強い傾向にあった。この理由を推察すると、大学入試やTOEIC等のビジネス資格において「読む」が重視されている点から、努力と上達の実感がやすく、信念が強められたのではないかと考えられる。関連して、大学入試センター試験やTOEICにおいては「聞く」が含まれていることから、努力信念において「聞く」が「読む」に続いて強いことも説明できる。

能力信念については、「聞く」「話す」が強い傾向がみられた。これは、即時的コミュニケーションに必要なスキルが、もとの才能やセンスによって規定されると認知される傾向を表していると考えられる。この理由を推察すると、「話す」「聞く」は即時的コミュニケーション状態で困難に直面した経験があり、これが能力信念を強めた可能性がある。

結果信念についても、「聞く」「話す」が強い傾向がみられた。この理由を推察すると、近年の即時的コミュニケーションが重視される社会で生活していることにより、このような信念を強めているのではないかと考えられる。

信念の強さの違いについて、大学生とビジネスパーソンの比較をしたところ、ビジネスパーソンの方が全体的に悲観的な傾向がみられた。この理由を推察すると、近年の「聞く」「話す」が重視される社会の中で、一般的に若い人々の方が「聞く」「話す」を重視した英語教育を受けているためにそれらのスキルが高く、英語の実用性、有用性について実感する場面が多いのではないかと考えられる。しかし、大学生とビジネスパーソンの背景要因としては

教育以外の要素も含まれるため、原因の特定は現時点では困難である。

4 技能間の関係については、4 技能間の信念はほとんど分化していないことが明らかになった。この理由を推察すると、日常で英語を学習したり、活用したりする場面では、4 技能が一体となっていることから、分化して認知する必要性が少ないからであると考えられる。4 技能が分化していないことを実践的に考えると、教育において信念を変容させるアプローチを考えた場合、4 技能別のアプローチではなく、英語全体の信念を変容させるアプローチが妥当であると考えられる。たとえば、「努力すれば英語のリスニングは上達する」「努力すれば英語のスピーキングは上達する」というよりも、「努力すれば英語は上達する」といったような、技能別ではないアプローチが妥当であると考えられる。

引用文献

- Horwitz, E. K. (1985). Using student beliefs about language learning and teaching in the foreign language methods course. *Foreign Language Annals*, 18, 333-340.
- 文部科学省 (2017a). 小学校学習指導要領 文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf (2018 年 1 月 24 日)
- 文部科学省 (2017b). 中学校学習指導要領 文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1384661_5.pdf (2018 年 1 月 24 日)
- 中谷素之 (2012). 動機づけ 自己調整学習研究会 (編) 自己調整学習—理論と実践の新たな展開へ 北大路書房
- Schoenfeld (1985) *Mathematical problem solving*. Academic Press.
- 島田英昭・鈴木俊太郎・田中江扶 (2016). 自律的英語学習者が持つ信念と動機づけ 日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集, 262.

付記

本研究は JSPS 科研費 JP15K02675 の助成を受けた。本論文は、第 47 回中部地区英語教育学会、日本心理学会第 81 回大会、日本教育心理学会第 59 回総会において発表した内容を再分析し、まとめたものである。

(2017年12月 1日 受付)

(2018年 3月19日 受理)